病院さま navis コラボプロジェクト

現場の意見を反映して、病院さまと一緒に作りました

共同開発インタビュー

コラボ 1

腹臥位用胸部クッション

岡山大学病院発案

腹臥位姿勢時の患者さん負担を軽減。楽な姿勢で快適性がアップしスムーズな検査・治療につながります。

1870年の開設以来、150年以上の歴史と伝統を受け継いできた岡山大学病院。2013年4月には国立大学病院初となる本格的IVRセンターが新設。今回は同センターで検査や治療を行う馬越先生、森光技師、谷看護師に共同研究から生まれた「腹臥位用胸部クッション」についてお話を伺いました。

参考：https://www.jsivr.jp/INE/

岡山大学学術研究院 医療開発領域　放射線科・助教 馬越紀行 先生
岡山大学病院 医療技術部（放射線部門）・主任診療放射線技師 森光祐介 様
岡山大学病院 放射線部・救急外来・看護師
インターベンションエキスパートナース（INE） 谷来代子 様



検査や治療時のうつぶせの姿勢を楽にしたい

▶馬越先生「放射線科のIVRにおいては、患者さんの身体に針を刺す治療があります。仰臥位で処置できればいいのですが、1/3ぐらいが腹臥位で行います。腹臥位というのは仰臥位と比べると、患者さんの身体に負担がかかります。治療が終わるまで長い場合だと2~3時間かかるので、患者さんのしんどさや肩痛がつらくならないような体位をとることが大事でした」

▶森光技師「CTを使って治療や検査をする際、画像を撮りながら進めていきます。両手を下ろした状態だと、腕が邪魔になって画像が鮮明に見えないという問題があります。普通のフラットな場所で両手を頭の方に挙げるのは患者さんにとって負担となるので、看護師さんがクッションやタオルなどを胸部に敷いていたのですが、不便だったんですね」

患者さんの体型や姿勢、希望に応じて多様なクッションで調整していたが難しさがあった。センターには30人以上の看護師がいるが、どの看護師が行っても同じような体位調整ができることが必要だった。

医療現場の「困りごと募集」が目に留まって

▶谷看護師「既存の腹臥位用クッションは、CTのガントリーに幅や高さ制限で使えず、手を挙げるための形でもありませんでした。患者さんの体格に合わせて適切なクッションを選択する難しさがあり、また、クッション内のビーズの詰まり具合により端の方が平らになりがちでした。クッションの高さを高くすれば、腕を下げることができ、肩の良肢位を保つことができるのですが、高くすればするほど、今度は背中から穿刺する先生の処置がやりにくい。患者さんが心地良く感じる高さと先生が治療しやすい高さのバランス調整が難しかったです」

そこで、谷看護師は医療現場の「困りごと募集」に応募。それがアズワンの担当者の目に留まり、共同研究が始まった。

患者さんと治療者の困りごと、両方を解決

▶谷看護師「両手を挙げやすい形状で、胸部にくぼみがありカバーは伸縮性に富んでいるので、バストの圧迫感が軽減されます。安定した体位保持と、長時間の腹臥位でも疲れないソフトな素材にこだわって作っていただきました。使用した患者さんからは、特に何もないですけど“何もない”というのがいいのだと思います。それが評価だと思っています」



CTなどの検査や治療時は両腕を頭方向に挙げる姿勢を長時間保つ必要があり、患者さんの肩や肘に疲労がかかり不快感を訴える場合があった。



胸部にくぼみ（ドットケイ線部分）を施したカバーの素材は耐アルコール性および耐次亜塩素酸性。内部のウレタンは体圧分散しやすいソフトクッションを使用している。

▶馬越先生「今までは看護師さんがクッションの具合を患者さんに確認するため、準備に時間がかかっていました。今ではこのクッションを使い、すぐに検査が始められるので、治療側としてもいいですね」

今回は胸部下に敷くクッションだったが、次は頭を載せる「枕」の研究が進行中。岡大病院のIVRチームでは少しでも患者さんの負担を減らし、治療をスムーズにするための取り組みが日々続いている。

製品紹介



製品に関する詳しい情報は下記のページをご覧ください。

▸808ページ

※IVRとはインターベンショナルラジオロジー（Interventional Radiology）の略で、がんや心臓・血管の病気、脳卒中などに対して画像でガイドして行う先端的治療です。（岡山大学病院IVRセンターウェブサイトより）

共同開発製品のご紹介